

六祖壇經の書志學的研究 (上)

松本文三郎

一 壇經の諸本

支那禪宗の第六祖慧能大師の作として傳へらるゝ法寶壇經には古來諸種の異本があり、時代によつて次第に變化し、其文字内容に少からざる異同を生じたりといふことは、斯經研究者の均しく認むる所である。現時主として行はるゝ所の壇經は、明藏本に据るものである。しかし明本といつても必ずしも悉くが同一ではなかつたらしい。現行本は人の知る如く、本文を行由・般若・疑問・定惠・坐禪・懺悔・機緣・頓漸・宣詔・附屬の十章に分ち、初に至元二十七年庚寅歲、古筠比丘德異撰の六祖大師法寶壇經序一篇と次に宋の明教大師契嵩撰の六祖大師法寶壇經贊一篇とを載し、經末には附錄として六祖大師緣起外紀と題し、門人法海等集と署し、始めに六祖の傳記（全唐文には之を以て法海の六祖壇經略序とする）一篇と、次に歷朝崇奉事蹟と題し、唐の憲宗、宋の太宗、仁宗、神宗の大師に對する謚號を授けられた件四條を記し、次に柳宗元の賜謚大鑿禪師碑と劉禹錫の大鑑禪師碑并佛衣銘とを載し、最後に至元辛卯（二十八年）夏南海釋宗寶の跋とを擧げてある。然るに余の藏す

る寫本にして卷末萬曆甲申(十二年)秋八節日恒照齋書と署する六祖壇經記(四言十六句)を有する本には、本文は前者と其順次内容殆んど全然同一であるが、經の初には德異の序を載し、契嵩の贊はなく、而して前者には經末附録として掲げた六祖大師緣起外紀の一篇(但此には門人法海等集の六字を削る)と歷朝崇奉事蹟の四條を擧げ、柳宗元や劉禹錫の碑文を除き、前者には佛衣銘の末に付記せる守塔沙門令韜錄と稱する一條のみを直ちに經末に記し、終りに宗寶の跋を載し、次に前記恒照齋の六祖壇經記を記す。此等は些細な變化であり、本經の内容研究に何等裨益する所のないものではあるが、明代に至る迄尙ほ壇經の體裁に於て變異を試みたものゝあることを知り得るのである。

現行本壇經は元の宗寶の改修本であることは其跋によつて秋毫疑を容れぬ。宗寶の跋は現行本の何れにも收載せられて居ることであるから人の皆知る所ではあるが、壇經の書志學的研究には頗る重要なものであるから、今其關係ある部分だけを此に摘録することとする。同跋にいふ。

余初入道有感於斯、續見〔壇經〕三本不同、互有得失。其校亦已漫滅、因取其本校讎、訛者正之、略者詳之、復增入弟子請益機緣、庶幾學者得盡曹溪之旨。按察使雲公從龍深造斯道、一日過山房、睹余所編謂得壇經之大全、慨然命工篆梓、顯爲流通、使曹溪一派不至斷絕。

之によつて現行本の由來は最も明了である。而して此跋は前にも一言した如く至元辛卯(二十八

年)に作られたものであるから、其改修も之より數年以前に出來たものであらう。所が同前記古鈔比丘德異の序には「至元二十七年庚寅歲中春日叙」とあるから、これは宗寶の跋より一年前に書かれたのである。一年の前後は必らずしも怪しむに足らぬが、宗寶は南海即ち廣東省のものであり、彼の書を得て之を出版したのは、按察使雲公從龍なるものである。然るに德異の序によれば

德異幼年嘗見〔壇經〕古本、自後徧求三十餘載、近得通上人尋到全文、遂刊于吳中休々禪庵。

とあり、之を刊行したのは德異自身であり、又其刊行の地は吳中即ち江蘇の吳縣であつたのである。のみならず彼の刊行した壇經は、彼が幼少より三十餘年徧ねく求めて得なかつた古本である。然らばその本が彼の出版と同時に若くは前後して改修せられた宗寶本でなかつたことは、殆んど疑を容れない。況んや宗寶の本は至元二十八年に出版せられ、德異の本は其前年既に出版せられたに於てをや。して見れば此德異の序は今の壇經に附せらるべきではなく、全く是れと異本異版の序であつたのである。恐らく明藏を出版する時、此等二本があり、同じく至元二十七、八年前後して作られた序跋であるから、誤つて同一本の序としたか、或は宗寶本が所謂古本に比して完備して居る所から、經本は全く宗寶本に据り、序文だけを探つて之を其初に収載したのであらう。何れにしてもこれは後人を誤らしむるものである。

宗寶の壇經跋に「續見三本不同、互有得失」といふを以て見れば、元時代壇經には少くとも三種の

異本があつたことが判る。三本の如何なるものであつたか、又如何様に其文字内容に異同があつたかは不幸にして今之を明らかにし得ないが、彼は此等諸本を校讐し、訛るものは之を正し、略なるものは之を詳かにし、復弟子請益機縁を増入し、第四本即ち現行明藏本をなしたといふ。現行本壇經中機縁第七に載する全部が、彼の自から増補する所でないことは後に之を説くが、兎に角壇經中特に機縁なる一章を設けたことは恐らく彼に始まるのであらう。又彼の増入する所の果して如何なる程度のものであつたかも明らかならぬが、其文字内容に於て少からざる變異をなしたものと思はれ、又之を後に説く興聖寺本や敦煌本に比し、其分段篇章の變化顛倒をも企てたものではなからうかとも思はれる。

又德異の壇經序には、

惜乎壇經爲後人節略^{○○○}太多、不見六祖大全之旨。

とあり、而して彼が幼時に見た古本を三十餘年求めて僅かに之を得て上梓したとある。即ち彼の古本なるものは可なり文章の長く内容の多いものであり、當時一般に行はれた壇經は比較的甚だ簡單となつて居たものに相違ない。しかし彼の出版する所が今の壇經でないとするれば、法寶の壇經以外頗る増益せられたものゝあつたことを知るべきである。而してそれは或は宋代契嵩の改修本ではなかつたらうか。鐔津文集(卷第十一)に「六祖法寶記叙此郎侍郎作附」なる一篇がある。此にいふ法寶記と

は即ち壇經のことである。此法寶記とは明教大師契嵩の編する所であり、此序は郎侍郎なるものゝ作つたのであるが、契嵩の著述に載する所であるから、便宜之を契嵩文集の中に編入したのである。叙末にいふ。

六祖之說余素敬之、患其爲俗所增損、而文字鄙俚繁雜殆不可考、會沙門契嵩作壇經贊、因謂嵩師曰、若能正之、吾爲出財模印、以廣其傳、更二載嵩果得曹溪古本校之、勒成三卷、燦然皆六祖之言、不復謬妄、乃命工鏤板、以集其勝事。至和三年三月十九日序

即ち契嵩は現行本壇經に收載する壇贊を作つた後二年、宋の至和三年（西曆一〇五六年）徳異の壇經出版の元の至元二十七年（西曆一二九〇年）に先だつ二百三十餘年、三卷本の壇經を編成したのである。此三卷本の壇經なるものも今傳はらぬのであるから、其内容の如何は勿論判らぬが、これは恐らく法寶の所謂三本中の一であつたのであらう。而して壇經を三卷に分つたとすれば、假令ひ其各卷は短いものであつたとしても、全體としては可なりに廣繁にして、壇經中最も詳細なるものであつたらうかと思はれる。徳異が「壇經爲後人節略太多、不見六祖大旨」といふのは固より誤で、古本の簡にして其詳細なるは寧ろ後人の之を増益した所であることは、此等諸本の比較研究によつて明らかに證し得らるのであるが、兎に角彼が簡單なるものを以て満足せず、詳細なるものを求めて之を出版したとすれば、或は此三卷本を出版したのではなからうか。此三卷本も其初めて出版

せられてから約二二三四十年を經過して居たので、其版も漫滅し多く世に傳はらなかつたに相違ない。勿論此德異の新たに壇經を上梓したのは宗寶の改修と殆んど同時であつたから、宗寶も未だ之を見るに至らず、彼は其古版本を見たので「其板亦已漫滅」といつたのかも知れぬ。是れによつて之を考ふれば、德異の所謂古本とは増益せられた宋の契嵩本を指すものであつたかとも思はれる。

併しながら後記興聖寺本壇經の卷首に載する宋の紹興二十三年晁子健の序には、

我六祖大師、廣爲學徒直說見性法門、愍令自悟成佛、目曰壇經、流傳後學、古本文繁、披覽之徒、初忻後厭、余以太歲丁卯月在蕤賓二十三日辛亥、於思迎塔院、分爲兩卷凡十一門

とあり、此には古本の文繁なるを厭ひ、之を節略し二卷となしたといふ。紹興二十三年（西曆一五三年）は前の契嵩の三卷本の成れる後約一百年であるから、此の古本とは即ち契嵩の三卷本を指したもののやうにも考へらるゝ。しかし興聖寺本では其六祖壇經序と題した次の行には、

依眞小師崑崙羅秀山惠進禪院沙門惠昕述

とある。之によると惠昕なるものが此序を作つたやうにも思はれるが、序文の終には明らかに

紹興二十三年六月二十日右奉議郎權通判蘄州軍州事晁子健記

とあり、其序文の内容からしても晁子健の作であることは疑ない。然らば此の「惠昕述」とは何を意義するかといふに、恐らくこれは六祖壇經を編述したといふことを意義するのであらう。又斯く解

釋するより外に方法はなからうと思ふ。現行本壇經にも其初には風幡報恩光孝禪寺住持嗣祖比丘宗寶編とある。彼亦之と同様なのであらう。所が此二卷本の壇經は序文によれば、晁子健の七世の祖父文元公なるものゝ觀た寫本によつたものといふ。(其文は後に引く。)文元公は眞宗前後の人であるから、契嵩の改修より少くも五六十年以前であり、三卷本は彼の未だ知らざる所である。而して文元公の見た壇經なるものが、即ち惠昕の編述した所であり、子健の「文繁にして學者の初は忻び後には厭ふ」となしたものであらう。若し果して然りとすれば其程度は判らぬが、契嵩の改修以前既に頗る増益改修せられた壇經なるものゝあつたことが判り、壇經は唐より元朝に至る間、幾多の變遷を經、其異本亦嘗に二三に止まらなかつたのである。尙ほ序にいふ契嵩の三卷本は、序に六祖法實記とある所を以て見ると、壇經といはずして法實記と稱したのではなからうか。而るに子健の二卷本には六祖壇經といふ。愈々以て其原本の同一ならざることが判る。

壇經には唐以來既に諸種の異本があり、中には頗る庸陋無識の徒の改竄増補したものもあつたらしいので、古から壇經に就いては學者の間に之を非議するものも少くなかつたやうである。前掲法實記叙の中にも「俗の爲めに増損せられ、文字鄙俚繁雜、殆んど考ふべからず」とまでいはれて居る。是れが後人の文字を顛倒修正し、其篇章までも改め按排するに至つた所以でもあらう。元の至正八年、即ち日本の貞和四年を以て我邦に來た竺仙梵仙の如きも、次の如くいつた。(續叢林公論曹溪

大師別傳祖芳の後序所引による。)。

六祖初於市邸、聞客誦金剛經、至應無所住而生其心、豁然開悟、遂乃求謁黃梅、此乃古本壇經所載、由緒宛然、蒙於十七八歲時獲見之、今悉無有、其自與黃梅相見、至和秀禪師偈等語、皆是妙悟性元、深達法本、異出天然、非凡庸未悟所能道者、今壇經謂五祖以袈裟遮圍、不令人見、爲說金剛經、恰至應無所住而生其心、言下便悟、蒙謂此乃六祖之下、鄙俚之徒、改竄造作之語、而加恰至二字、原其鄙意、卽謂親從其師、言下而悟、親得其法、乃紹六祖位也、殊不知具無師智自然智、自得自悟、方堪傳授。

又いよ。

以袈裟遮圍不令人見、其袈裟乃有神通、人之不能見歟、否則但是踏襲世尊於多子塔前、命迦葉以僧伽梨圍之語耳、忠國師云、把他壇經改換、添糝鄙談、削除聖意、惑亂後徒。

壇經が後人によつて改竄せられたことは疑を容れないが、梵仙の幼時に見た古本とは、果して如何なるものであつたか。六祖が、初め客の金剛經を讀むを聞き豁然開悟したことは現存何れの本にも存し、黃梅に至り再び金剛經を聞き言下に悟つたことも亦同様である。但袈裟を以て遮圍し人をして見せしめずとの語は、興聖寺本にも存するが、敦煌本にはない。梵仙は元末の人である。果して敦煌本を見たとなすべきであらうか。若し彼の記憶の誤でないとするれば、此等諸本以外尙ほ敦煌本

に近い一本があつたのではなからうか。但敦煌本にあつても斯く前後二回金剛經のことは出て居るが、何れにも經の應無所住而生其心の句は擧げてないのである。尙ほ序に一言すべきは曹溪大師別傳では、何處にも金剛經を聞き開悟したとはない。而して六祖が樂昌縣の西石窟の遠禪師なるものに就き禪を學び、更らに惠紀禪師が投陀經を誦するを聞き之に感じ黃梅に行つたこと、なつて居る。投陀經なる經典が果してあつたかどうかは知らぬが、兎に角別傳と壇經とは全然其趣を異にして居る。勿論後世の壇經が別傳より取る所も少くない。而して別傳は其中に

先天二年壬子歲〔六祖〕滅度至唐建中二年計當七十一年實は六十八年

とある所から、建中二年に作られたものと認められ、六祖の傳記としては頗る古く信用するに足るものと思はれ、祖芳も

謂壇經古本湮滅已久、世流布本宋後編修、諸傳亦非當時撰、唯此傳「曹溪別傳」去大師謝世不遠、可謂實錄也、而與諸傳及壇經異也。

といふ。後世の諸傳や壇經と異なることは事實であるが、果してこれが實傳と稱すに足るや否は大に疑はしい。最近胡適氏は別傳は大體王維の能禪師碑や乃至は神會の顯宗記の文により偽作した所ありといひ、其年代の記述に至つては八誤を擧げ、

曹溪大師別傳、實在是一個無識陋僧妄作的一部偽書、其書本身毫無歷史價值、而有許多荒謬的錯

誤と述べ又重ねて

總之別傳的作者、是一個無學問的陋僧、他閉門虛造曹溪大師的故事、裝上許多年月、儼然像一部有根據的傳記了。可惜他設有最淺近的算學知識、下筆便錯、處々露出作偽的痕迹。

とまでいつて居る。(國立武漢大學文哲季刊第一卷第一號跋曹溪大師別傳)胡氏の論も餘りに極端なやうであり、果して別傳の全部が偽作であるか否は尙ほ考慮を要するのであるが、其年代數字の記述の誤れるは掩ふべからざる事實である。而して壇經の記述と異なる所も果して何れを取るべきかは容易に決し難いのである。但吾人は此書あるによつて六祖滅後六七十年、建中前後に於て斯かる傳説の存したことを知り得るのは、六祖の傳記研究上尠なからざる興味を感ずるのである。

之を要するに六祖壇經は明以後法寶本のみが六祖の大全を得たものと見做され、専ら世に流行したが爲め、宋以前の古本は悉く湮滅し、壇經の本文が如何に變遷し來つたかの歴史は甚だ明了を缺き、其原形の如きは唯暗中摸索するに過ぎなかつたのである。然るに最近に至り二種の壇經異本が發見せられ壇經史上に少からざる光明を與ふるのは、壇經研究者に取つては實に一大慶事といはなければならぬ。其一是興聖寺本壇經であり、其二是敦煌本壇經である。以下少しく之に就いて述べやう。

前掲胡適氏の「歐曹溪大師別傳」に於ける數字計算上の八誤とは、大要次の如くである。

(一)傳には慧能は先天二年(七一三)年七十六を以て没したといふ。で咸亨五年(六七四)は慧能三十七歳でなければならぬが、傳には三十有四とする。(二)又咸亨元年は三十三歳なるべきに、傳には三十となす。(三)神龍元年には高宗已に崩じて二十二年なるに、傳には高宗の敕がある。(四)神龍三年には武后已に没して二年なるに、傳中仍ほ高宗の敕がある。(五)先天二年より建中二年に至る迄は六十八年なるべきに、傳には七十一年となす。(六)傳には先天二年上足弟子行滔所傳の衣を守り、三十五年を経て韋據、大師の碑を立つ、後武平一開元七年に之を磨却し自から武平一の文を著くとあるが、先天二年は即ち開元元年であるから、それより開元七年までは只六年であつて、三十五年を経過すべき筈はない。(七)傳には前に上元二年行滔が六祖の袈裟を奉じて上都に赴くことがあり、次に乾元二年に行滔病を以て辭し、上足惠象等が入内することを説く。乾元は上元の前にあり、今先後倒置す。此上元二年は乾元元年の誤なるべし。(八)弘忍の没するは咸亨五年、此年慧能は三十七歳、別傳に三十四歳となすは固より誤であるが、傳には慧能は咸亨五年、三十四歳傳衣得法、儀鳳元年三十九歳剃髮受戒といふ。而も咸亨五年から儀鳳五年までは中間只兩年である。何ぞ五歳の相違あらん。

別傳の著者が斯かる明白なる誤をなしたのは果して何故であるか判らぬ。併し誤は兎に角誤である。但胡適氏の説に於ても吾人の尙ほ大に考慮を要する點がある。氏は六祖法寶記叙に契嵩が古本を得て之を校し勒して三卷となしたといふ古本を以て、直ちに別傳のこととなし、

契嵩居杭州、也在浙中、他所得的「曹溪古本」大概即是這部曹溪大師別傳

といひ、而して其理由として

故有七十年代的懸記

六祖壇經の書志學的研究

(一一)

と斷して居るが、これは大に疑を容るべきである。後世壇經中には別傳から編入した文字も少くないが、壇經と別傳とは固より異なつて居る。又壇經を校正改修するに當り別傳をも參照したであらうが、曹溪古本とは文字酸味であつて、壇經の古本か別傳の古本か明らかならぬのである。又七十年の懸記(即ち六祖滅後七十年二菩薩東方より來り、吾宗を興隆すとの懸記)は恐らく本とは別傳より取つたものであらうが、契嵩が始めて挿入したか否は疑はしい。現明藏本の文は別傳と多少異にして、景德傳統錄と全然同一である。

曹溪別傳

我滅度七十年後有東來菩薩、一在家菩薩、修造寺

舍、二出家菩薩、重建我

教。

景德傳統錄

又云、吾去七十年、有二菩薩從東方來、一在家、一出

家、同時興化建立吾宗、締

緝伽藍、昌隆法嗣。

明藏本壇經

又云、吾去七十年、有二菩薩從東方來、一出家一在家

同時興化建立吾宗、締緝伽

藍、昌隆法嗣。

而して景德傳統錄の此文は景德元年に書かれたものである。(同書卷五、慧能傳の中には「大師自唐先天二年癸丑入滅、至今景德元年甲辰歲、凡二百九十二年矣」の句がある。)景德元年(一〇〇四年)は契嵩三卷本の壇經を改修した至和三年(一〇五六)より約五十年以前である。三卷本中にも此と同一文句があつたかも知れぬが、若しあつたとすれば、それは直接別傳から取つたのではなく、寧ろ近く景德傳統錄から取つたものといはなければならぬ。

以上の理由によつて胡適氏が「明藏本の祖本、是北宋契嵩的改本」と斷じたのは、大に疑を容るべきである。且つ明藏本即ち元の法寶本の著者は古本を得て之を校讐し「訛者正之、略者詳之」といふのみで、古本を削除したことは一言も述べて居らぬ。

契嵩本は三卷であり、古來壇經の最も混淆なるものと思はるゝが、明藏本は唯一卷であるから、其祖本が三卷本であつたとすれば、増補よりも削除の方が主となるべき筈であらう。彼は壇經の大全を得んと欲したのであるから、三卷本に据つたとすれば、之を斯く節略することもなからうかと思ふ。要するに明藏本の祖本が何れの本であつたかに就いては多少の疑問がある。余輩は寧ろ其底本の次に述ぶる興聖寺本であつたのではなからうかと思ふ。興聖寺本には前記七十年の懸記は顯はれて居ないが、是れは寧ろ景德傳統録によつて補つたものと考ふべきである。

尙ほ少しく餘談に涉るが序に一言して置くべきは胡適氏が現存曹溪大師別傳入由來に對する誤解である。別傳の巻尾に「貞元十九、二月十九日畢」「天臺 最澄封」の二行の識語がある。然るに最澄の入唐は貞元二十年であり、其年九月始めて天臺に往つたのである。如何にして貞元十九云々の題記があるのであらう。又此別傳は傳教將來錄中の越州錄に載せられ、而して越州錄は貞元二十一年越州に在り抄寫した所であるから、更らに天臺最澄の題記あるべからざる筈であるといひ、氏は之を次の如く解釋して居る。

惣祖芳之跋非有心作僞、按臺州錄之末有題記、年月爲「大唐貞元二十一年歲次乙酉二月朔辛丑拾〇玖日乙未、」大概祖芳一時記應有誤、因「二月十九日」而誤寫二十一年爲「十九年、」又誤記「天臺」二字、遂使人生疑了。

これは要するに胡氏が祖芳の刻本を見ざるが爲め、斯かる附會な解釋をなしたに外ならぬ。貞元十九云々の文字は決して祖芳の誤寫ではなく、明らかに卷末に存するのである。臺州錄末の識語にある二月十九日の文字によつて貞元十九年と誤寫したといふが如きは、餘りに穿鑿に過ぎ、寧ろ滑稽を感じしむるものである。別傳は胡氏もいふ如く越州錄に載せらるゝのであつて、臺州錄にあるのではない。何んぞ臺州錄の識語を誤り取らん。況んや其十九日を十九年と誤るべき筈はない。別傳末に貞元十九とあるのは、言ふ迄もなく傳教の天臺に至る以前である。而して彼は其錄の終に識して「今年進越府、二僧八五部灌頂壇、又

抄取念誦法門、前後都惣二百三十部四百六十卷也」といふが、其將來する所は必らずしも彼若くは義眞の手寫する所のみではなく、當時手寫の本があり、購得らるゝものあらば之を購ひ、又他人より寄與せらるゝものもあつたであらう。此等は何れも將來錄中に取載せられたのである。これは何人の將來錄にあつても同様である。乃ち此別傳の貞元十九云々の識語の存するは、即ち彼の渡唐以前の抄寫本を偶々購得たか又は寄與せられたのである。

二 興聖寺本と敦煌本壇經

興聖寺本六祖壇經とは京都興聖寺に藏せらるゝ古版本壇經であつて、今方冊本となつて居るが、元より方冊であつたか卷子であつたか明らかでない。其版式や字體を熟視するに、これは本と宋版本を其儘五山時代我邦に於て覆刻したものとすることは疑を容れぬ。而して宋本の各頁七行づゝの折帖式のものであつた痕迹が其儘に残り七行毎に行と行との間少しく幅廣き空處を存し、原本一紙の終の處に「六祖上」又は「下」と刻し、其下に一、二等紙數を記す。此本は上下二卷に分れて居るが、紙數は全部を通じ十五紙（上卷は七紙十四行、下卷は約八紙）一紙四十二行、行二十二字。今方冊本として上卷は十五葉、下卷は十九葉、各葉二十行となつて居る。今序文の二葉と下卷の第二葉とが缺けて居るが、序文だけは之を補寫してある。此書の終には左の識語が墨書せられてある。

慶長四年五月上申旬初拜誦此經伺南宗奧義了次爲新學加朱點而已

又別行に

慶長八年三月朔日至八日一遍拜讀之次加和點了

記者 同 前

此にいふ了然とは現興聖寺主日種讓山老師の言によれば、興聖寺の開山圓耳のことであるといふ。圓耳字は虛應、始め日蓮宗に出家し、後に禪宗に歸し、慶長八年興聖寺を創建し、元和五年、歳六十一を以て入寂した人である。で此本は圓耳の興聖寺を創むる以前から有して居た手澤本であつたのである。而してその缺けた序文の補寫も亦此圓耳自身の筆であるといふ。版本その物にあつては其出版の年月や寺院又は書肆の名を記してない。此本は、その原宋版は言を俟たず、其覆刻本も今世に殆んど見るを得ないのであるが、其序文の補寫せられ居る所から考ふれば、慶長前後に向ほ何れかの寺院に之を藏するものがあつたのであらう。

興聖寺本壇經は現明藏本に比しては文字の異同甚だ多いのみならず、篇章の配置に至るまで頗る相違する所がある。要するに明藏本の中には節略する所もあるが大體に於て文章も長くなり、事實も増補せられ、全部を通じ大に整理せられたものであることは明らかである。だから興聖寺本は二卷に分たれては居るが、實は明藏本の方が遙かに長くなつて居る譯である。而して興聖寺本の由來に就いては、前掲晁子健の序文が委細を悉くして居るから今之を左に引用して置かう。先づ始めに

は六祖壇經序と題し、次の行に前に述べた如く、依眞小師邕荔維秀山惠進禪院沙門惠所述と署し、次の行から序の文が始まり、先づ見性の功德を説き、それから前に引用した六祖が壇經を説き後學に流傳して居るが、其文繁なるにより今分つて二卷十一門となすことを述べ、それから此書の由來を説き次の如くいふ。

子健被旨入蜀、回至荆南、於族叔公祖位、見七世祖文元公所觀寫本六祖壇經、其後題云時年八十一、第十六次看過、以至點句標題、手澤具存、公歷事太宗、眞宗、仁宗三朝、引年七十、累章求解、梵戟以太子少保致仕、享年八十四、道德文章具載國史。

次に文之公と壇經との關係を説き、公弱冠の時高士劉惟一なるものを訪ひ、問ふに死生のことを以てした所が、劉は身體は滅するも心性は不滅なるを説いた。爾來意を禪觀に留め、老へて愈篤かつた。公は平生學ぶ所三教俱に通じたが、晩年尙ほ壇經を看、孜孜として倦まなかつた。

子健來佐斬春即、遇太守高公、世史篤信好佛、一日語及先文元公所觀壇經、欣然曰、此乃六祖傳衣之地、是經安可闕乎、乃用其句讀、鏤版刊行、以廣其傳。

といひ、而して終りには前に述べた如く

紹興二十三年六月二十日右奉議郎權通判斬州軍州事晁子健謹記

とある。此前文に「古本文繁披覽之徒初忻後厭、余以太歲丁卯、月蘇賓二十三日辛亥、於思迎院分

爲兩卷、凡十一門、貴接後來同見佛性者」とある所から見れば、彼の序は紹興二十三年此書出版の時に書かれたものであるが、之を二卷十一門となしたのは丁卯の歲即ち紹興十七年であつたのである。彼は此時多少古本の文を節略したかも知れぬが、其原本の宋初眞宗前後のものであつたことは明らかである。而して諸種の點からしてこれが唐本に最も近いものであつた。（此事は次節三本比較の章に於て述べる。）

次に敦煌本壇經は元々スタイン氏發掘品中に發見せられたもので、今大英博物館に藏せられて居る。前年矢吹氏は之を影寫し來り、「鳴沙餘韻」中に縮寫影印せられて居る。（同書圖版一〇二、一〇三。）同書の解説は今尙ほ出版せられないので、其書の體裁大さ等は明らかならぬが、此圖版によつて見れば、これは彼弘法大師が在唐の時抄寫將來せられた三十帖冊子様の體裁のものであるらしい。一紙を二折とし綴られ、全部二十六紙であるが本文は二十五紙で終つて居る。一頁（即ち一紙の半葉）五行、時あつては六行、七行乃至八行に互り等しからぬ。一行の字數も少きは二十字、多きは二十五、六字にも達し、著しく異なつて居る。序跋なく、書寫年代も記してない。が其書體を按んずるに大體唐末五代頃のものと思はる。自性の性は常に姓に作り、着は看に作らるゝ等、誤寫も頗る多く、時には文章の讀み難い所もあり、餘り善い寫本ではないが、其年代に於ては現存する壇經中最も古く、之によつて少くとも唐末頃の壇經の體裁を知り得る點に於て、吾人の最も大なる

興味を有するものである。唐末五代の頃には遠く敦煌地方に迄禪教の傳はると共に、嶺南に成れる壇經の流布せられたことが判るので、此點に於ても吾人には多少の興味がないではない。

敦煌本壇經には、分卷はいふ迄もなく、篇章も分たず、始から終まで引續き書かれてある。此本が壇經の最初の形を其儘維持保存して居るものとは考へられぬが、篇章を分たないのは、壇經原始の形であつたのであらう。既に篇章が分たれて居つたとすれば、之を特に削除し續け書きにする筈もないやうに思はれる。若し果して然りとすれば、壇經に篇章を分つたのは宋代晁子健の興聖寺本から始まつたのであらう。而して一度興聖寺本が篇章を分つたので、後世元明諸本に至る迄、分卷は之を撤去したが、分章は多少變更しながら、之を踏襲したのである。

敦煌本は初めに題して

南宗頓教策上大乗摩訶般若波羅密經

六祖惠能大師於韶州大梵寺施法壇經一卷

といひ、更らに次の行には

兼受無相 戒弘法弟子法海集記

とあり、卷末には

南宗頓教策上大乗壇經法一卷

とある。尙ほ敦煌本には其末に

大乘志三十 大聖志四十 大通志五十 大寶志六十

大法志七十 十德志八十 清之藏志三十 清持藏志四十

清寶藏志五十 清蓮藏志六十 清海藏志七十 大法藏志八十

此是菩薩法號

の四行の文字が記されてあるが、如何なる意義を有するか明らかならぬ。何れにしても是れは壇經と關係なく、所持者が餘白に何等かの覺書として書付けたのであらう。

敦煌本壇經には勿論文章の廣略、事實の出入頗る多く、全然同一ではなく、又前にも一言した如く篇章を分たぬが、其内容並びに順序は大體興聖寺本と殆んど相近い。但其篇末に至り異同が頗る多いのみである。是によつて見ても興聖寺本は固より多少別傳や其他の書を參照したであらうが、主として敦煌本により、其篇末に至り特に改修をなしたものと推定せらるゝ。而して此等の原文并に改修の文は共に宋以後の壇經に絶えて見ざる所である。

敦煌本内容變異の主なるものに就きては更らに節を改め略述しやうと思ふが、此には敦煌本の必らずしも壇經の原始の形でないことゝ、又此本改修年代の大體を明らかにする爲め、次の句を引用して置く、(元以後の諸本には此等の句は何れも削除せられて居る。)敦煌本壇經末にはいふ。

此壇經法海上座集、上座無常、付同學道祭、々々無常、付門人悟眞、悟眞在嶺南溪漕山法興寺、見今傳受此法、如付山法頃德上座、恨知心信佛法立大悲、持此經以爲衣、承於今不絕。

此末段の文意は甚だ明了を缺くが、兎に角此本の作られた時には、悟眞なる傳法者が生存して居ることだけは疑ない。而して悟眞は六祖から第四代に當るもの、やうである。しかし興聖寺本に据ると其傳統は稍々之と異なり次の如くなつて居る。

泪乎法海上座無常、以此壇經付囑志道、志道付彼岸、彼岸付悟眞、悟眞付圓會、遞代相傳付囑。

此にいふ悟眞とは前にいふ道祭の門人悟眞と同一人ではなからうか。しかし彼にあつては傳統が六祖―法海―道祭―悟眞となり、此にあつては

六祖―法海―志道―彼岸―悟眞―圓會

となり、全く其傳統者を異にする。而して彼にあつては、悟眞は六祖以後第四代となつて居るが、此では第五代となる。古來僧侶には殊に同名が多いから、或は悟眞が其傳統を異にし、前後二人あつたのかも知れぬ。或は又道祭とは志道と同一人で、悟眞なるものは志道と彼岸と二人に就いて學んだものかも知れぬ。何れにしても悟眞は六祖以後四代若くは五代の人であり其在世の時敦煌本は成り、更らに圓會の時代に及び興聖寺本若くは其原本惠昕本が出来たものと推測せらるゝ。此等の

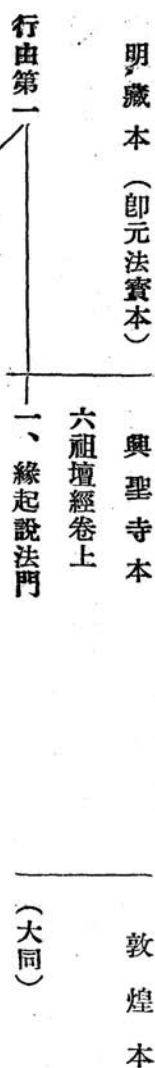
傳統者に就いては其傳記更らに明了ならぬので、其生卒年代も判らぬが、今姑らく南嶽杯の傳統に之を對比して見れば、南嶽系の六祖第四代は百丈懷海であり、第五代は黃蘗希運や潯山靈祐杯に當る。若し悟眞が此等の人々と同時在世であつたとすれば、先づ大體唐宋大中前後、即ち八百年代の中葉、六祖●約一二三十年頃に相當し、早くも此時代敦煌本壇經は修補せられたものと見るべく、興聖寺本の原本は更らにそれより一二代後くれ、五代の初を溯らぬものかと思はれる。それにしては景徳傳統錄や契嵩の三卷本壇經に比しては遙か數十年前以前の古本である。

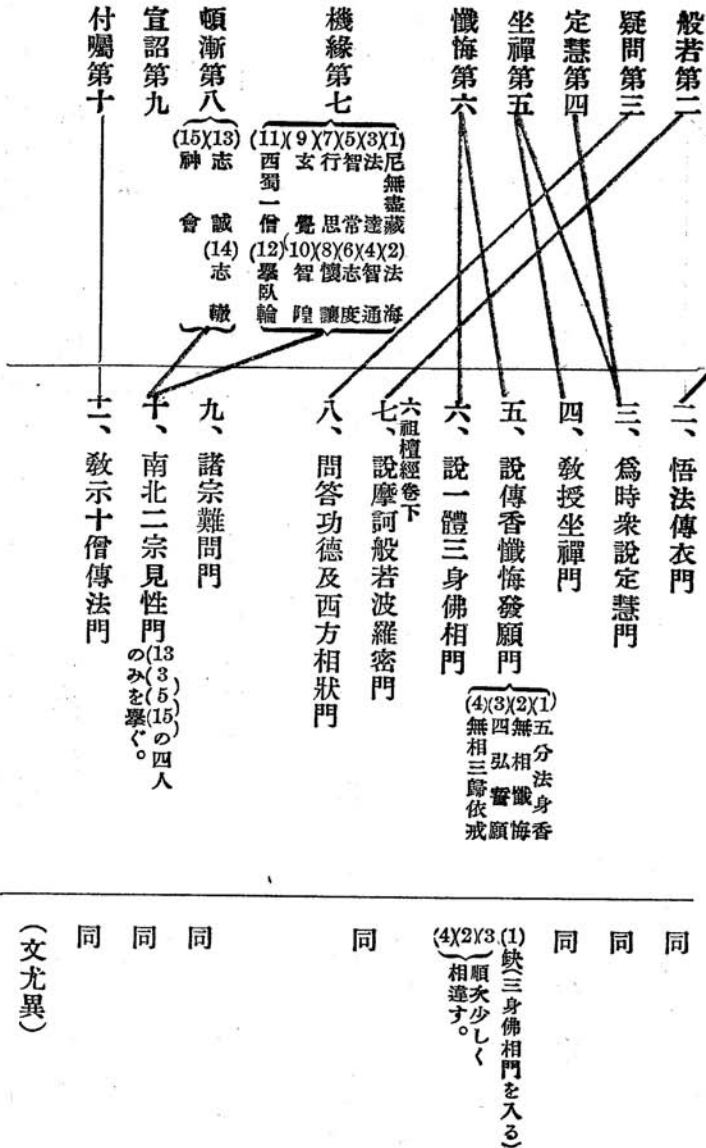
附記——敦煌本壇經は影寫本より大正一切經中にも編入せられ居るが、本篇に引用する所は總べて前記影印本に據る。

三 壇經三本の比較 (一)

敦煌本、興聖寺本並びに明藏本の文字内容は甚だしく相違する所があり、今一々之を比較列擧することは餘りに繁瑣に渉るから之を略するが、其中最も著しいものと、其變異の一斑を想像せしむるに足るものとの數例を掲ぐることにする。

(一) 先づ第一には壇經篇章排列の變異を示す。





上表によつて一見明らかなる如く、興聖寺本は大體敦煌本と其順次を同じくし、唯其文句事實に於て多少の異同出入をなすのみである。但全篇を十一門に分つたが爲め、一章の終や始めには、幾

分の文章の變化をなしたことは言ふ迄もない。唯興聖寺本第五、第六門に相當する所のみには敦煌本と多少の順序異同がある。即ち敦煌本では興聖寺本の第六説一體三身佛相門が直ちに第四教授坐禪門の次に來り、第五説傳香懺悔發願門の戒、定、慧、解脫、解脫智見の自性五分法身香なる一段が缺け、之に次ぎ四弘誓願、次に無相懺悔の説となり、興聖寺本の無相懺悔と四弘誓願との説は内容に於ては大同であるが、其順序か前後顛倒して居るのである。思ふに興聖寺本では五分法身香の一段を補ふ爲め、三身説は之を別に一門となし、次に排置したのであらう。宗寶本(明藏)に至つては此等二本と順次頗る相違して居る。先づ敦煌本や興聖寺本の第七般若門と第八問答門とを行由(即ち前の悟法傳衣門)の次に移し、其文字から偈頌までも大に變更した(これは後に説くことゝする)。又前者の三四五六の四門の順序は大體同じいが、内容は大に整理されて居り、第十南北二宗見性門は大に之を増補し、機緣、頓漸の二となし、又新たに宣詔の一章を設けた。前にも一言した如く宗寶は其壇經跋に於て「増入弟子請益機緣」といつたのは、即ち之を指すのであらう。しかし精密にいへば機緣の一章全部が彼の新たに増補した所ではない。機緣、頓漸の二章に涉り志誠、法達、智常、神會四人の話は大體古本に既に存する所であり、他の十一人の話を二章に適宜分配増補したことが判る。而して宗寶本懺悔章では興聖寺本と同じく初めに五分法身香、之に次ぐに無相懺悔、四弘誓願、無相三歸依を以てし、最後に三身を説くを以て之を見れば、此本の直接、間接興聖寺本

の系統を承繼したものであるを知るべきである。

尙ほ此に吾人の注意すべきは現行宗寶本般若章の終に附する「說通及心通乃至悟則剎那間」の偈は、敦煌本や興聖寺本にあつては共に次の「問答功德及西方相狀門」(現行本疑問章)の終に附し、現行本疑問章の終に存する「心平何勞持戒乃至西方只在目前」の偈は宗寶本に至つて始めて顯はれたものである。而して明藏本懺悔章の終の「迷人修福不修道」の偈は、敦煌本や興聖寺本に於ける「說摩訶般若門」(現行本般若章)の終の偈の此に移されたものであり、懺悔門には本來偈はなかつたのである。此等も可なり大なる改修といはなければならぬ。

(二) 三本の文字が如何様に改變せられたかの一斑を知るが爲め、便宜卷初(緣起說法門)の文を擧げて置かう。

敦煌本

惠能大師於大梵寺講堂中、
昇高座、說摩訶般若波羅密
法、受無相戒、其時座下僧
尼道俗一萬餘人、韶州刺史
等據(章據等の誤)及諸官寮

興聖寺本

大師唐時、初、從南海上經
曹溪、韶州刺史章據等、請
於大梵寺講堂中、爲衆開緣
授無相戒、說摩訶般若波羅
密法。大師是日、說頓教、法直、

明藏本

時大師經寶林、韶州章刺史
名與官寮入山請師、出於城
中大梵寺講堂、爲衆開緣說
法、師陞座、次刺官僚三十
餘人、儒宗學士三十餘人、

三十餘人、儒士（三十の字を脱す）餘人、同請大師說

摩訶般若波羅密法、刺史遂

令門人僧法海集記、流行後

代、與學道者永此宗旨遞相

傳授、有所於約、以爲稟承

此壇經。

了見性無礙、普告僧俗、令言下各悟本心、現成佛道。

座下僧尼道俗一千餘人、刺史

史官寮等三十餘人、儒宗學

士三十餘人、同請大師、說

是法門、刺史韋據令門人法

海抄錄流行、傳示後代、若

承此宗旨、學道者遞相教授

有所依憑耳。

僧尼道俗一千餘人、同時作衣願聞法要。

大體からいへば三本の中敦煌本の文は最も簡にして、興聖寺本之に次ぎ、現宗寶本最も繁であるが、宗寶本は緣起説法の一門を立てず、之を行由の初に附記したので此では其文最も削略せられたのである。が之によつて壇經の文字が時代によつて如何様に變改せられたかの一斑を推測し得らるゝことと思ふ。

(三) 文字の變化は少いが、後世禪學者の普ねく傳唱する所であるから、此に五祖に呈して己れの見解を述べた神秀及び慧能の偈を擧げて置く。

敦煌本

(神秀の偈)

身是菩提樹

時々勤拂拭

(慧能の偈)

菩提本無樹

佛姓常清淨

又偈曰

心是菩提樹

明鏡本清淨

心如明鏡臺

莫使有塵埃

明鏡亦無臺

何處有塵埃

身為明鏡臺

何處染塵埃

興聖寺本

身邊菩提樹

時々勤拂拭

菩提本無樹

本來無一物

(缺)

心如明鏡臺

莫使染塵埃

明鏡亦非臺

何處有塵埃

明藏本

身是菩提樹

時々勤拂拭

菩提本無樹

本來無一物

(缺)

心如明鏡臺

勿使惹塵埃

明鏡亦非臺

何處惹塵埃

是れによつて見れば後世六祖の作として人口に膾炙する「本來無一物」の句は、宋本以來始めて顯はるゝ所であり、唐本には未だ見ないのである。又神秀、慧能兩偈の第四句は何れも唐本では「有塵埃」となつて居るのが、興聖寺本では神秀の偈だけが「染塵埃」と變じたに關はらず、慧能のは尙ほ「有塵埃」となつて居る。然るに元本からは何れも「惹」字と變つて來たことが判る。興聖寺本の「染」の字は唐本に於ける慧能第二の偈の第四句の「何處染塵埃」とある所から採り來つたのであら

う。尙ほ景德傳統錄によれば神秀の偈は「身是菩提樹、心如明鏡臺、時々勤拂拭、莫遣有塵埃」とあり、大體敦煌本の面目を存し、未だ興聖寺本の影響を受けて居ないやうであるが、慧能の偈は「菩提本非樹、心鏡亦非臺、本來無一物、何假拂塵埃」といひ、第一第二句の無が共に非となり、第四句は更らに變じて「何假拂」となつて居る。「本來無一物」の句の興聖寺本と同一なる所から見れば、興聖寺本を取つて更らに之を修正したのではなからうか。更らに契嵩の傳法正宗記(卷六)を參照するに、神秀の第四句は「莫使惹塵埃」となり、大體元本壇經と同じく、慧能の偈は興聖寺本と全然同じい。して見れば「惹」字を神秀の偈の第四句に用ゐたのは契嵩の三卷本壇經からではなからうか。三卷本壇經は前にも一言した如く今傳はらぬが、傳法正宗記は契嵩の殆んど之と前後して編した所であるから、恐らく此等の偈も兩者同一であつたらうと推測せらるゝ。(三卷本壇經は宋の至和三年に成り、傳法正宗記編成の時は明記せられぬが、彼が其入藏を請ひ、其敕許を受けたのが、嘉祐七年三月であるから、恐らく其前年頃に成れるものかと思ふ。若し然りとすれば三卷本壇經に後くるゝこと僅かに五年である。)而して元本壇經では神秀の偈に「惹塵埃」とある所から、遂に慧能の句までも「惹」に改めたのであらう。斯く考へ來れば三卷壇經は直接興聖寺本に本づき之を改修し、宗寶本は興聖寺本に據り、傍ら三卷本をも參照し修正したものと推定せらるゝのである。

(四) 慧能が將さに五祖の下を去らんとするや、五祖之に告げていふ。

敦煌本

(缺)

汝去、努力、將法向南、三、
年勿弘此法、難去在後、弘
化善誘迷人、若得心開、汝
悟無別。

(缺)

興聖寺本

但依此見已後、佛法大行矣。
汝去後一年吾即前逝。五祖
言汝今好去、努力向南、五
年勿說佛法、難起已後行化
善誘迷人、若得心開、與吾
無別。

惠能後至曹溪、又被惡人尋
逐、乃於四會縣避難、經五
年在獵人中、國與人說法

(缺)

(三八)

明藏本

祖云、以後佛法由汝大行、
汝去三年、吾方逝世、汝今
好去、努力向南、不宜速說
佛法難記。

惠能後至曹溪、又被惡人尋
逐、乃於四會避難、獵人隊
中、凡經一十五載、時與獵
人隨宜說法、獵人常令守網
每見生命盡放之、每至飯時
以菜寄煮肉鍋、或問則對曰
但喫肉邊菜。

此には三本の文の次第に増益せられたことを見得るのである。而して敦煌本では缺けて居るが、興聖寺本に「汝去後一年、吾即前逝」とあるのが、明藏本では三年となつて居る。又敦煌本では六祖南に去つてより三年。此法を弘むる勿れとあるのが、興聖寺本では五年となり、明藏本では唯「不宜速説」と漠然たる語となり、年数を限らない。此三年や五年とは即ち後六祖が法難を避け、四會縣に於て獵人中に混居したことを豫言したものと思ふ。で興聖寺本では五年の間獵人中に避難したとあるが、明藏本では「凡經一十五歲」とある。但王維の碑には「混農商於勞侶、如此積十六載」といひ柳宗元の碑にも「逖隱南海上、人無聞知、又十六年、度其可行」といひ、何れも十六年となつて居る。何れが果して事實であつたか殆んど知るべからざるのである。今一見之を知り易からしむる爲め、重ねて左の表を作つて置く。

	王維碑	曹溪別傳	敦煌本	興聖寺本	景徳傳統錄	明藏本
五祖沒年	柳宗元	六祖去後三日	—	一年	四年	三年
六祖避難	十六年	五年	三年	五年	(五年?)	十五年

景徳傳統錄六祖傳には、六祖の黄梅に往けるを咸亨二年(六七二)とし、其年衣鉢を傳へ、而る後四會の間に隠れ、儀鳳元年(六七六)に南海印宗に至り受戒し、明年二月韶州寶林寺に歸り説法すといふ。即ち咸亨二年より儀鳳元年に至るは、正に五年である。

但古鈔本にあつては往々にして文字の誤脱誤字等の存するのは勢の免れざる所であるから、此等異説も或は次第に誤に重ぬるに誤を以てし、遂に斯に至つたのかも知れぬ。若し斯かる見地より強いて想像すれば、六祖の難を四會獵人中に避けたのは、本來十六年であつたのを、後人之を轉寫するに當り、誤り「十」字を脱し、單に「六」となし、更らに「六」が行體稍相似たるより三と變じ、敦煌本の三年説となり、「三」が更らに「五」と誤寫せられ、別傳や興聖寺本等の五年説となり、而して明藏本にあつては此十六年説と五年説とを合し、十五年となすに至つたのではなからうか。別傳に五祖の没年を六祖の去つてより三日といふのは、果して「日」か「年」か明らかでないが、明藏本の三年説は即ち之を「年」字となしたのであらう。興聖寺本の一年説は若し五祖の没年を上元二年とすれば、或は壇經の原形であつたのではなからうか。景德傳統錄では五祖は六祖の去つて後三日上堂せなかつたとはあるが、其年に逝いたとはなく、四載を經、上元二年乙亥の歲に滅したとある。四歳の説は何れより來つたか明らかならぬが、上元二年は咸亨五年（即ち上元元年、別傳では六祖の五祖の下を去つた年）の翌年に相當する。が此等は何れも想像であつて何人も今は確として之を知り得ないのである。

(五) 南海宗印法師の話は敦煌本壇經には全然之を闕くが、興聖寺本以後悉く之を存する。而してこれは明らかに別傳より取り來つたのであらう。

別傳

至儀鳳元年、初於廣州制旨寺、聽印宗法師講涅槃經……時囑正月十三日、懸幡、諸人夜論幡義、法師廊下隔壁而聽、初論幡者、幡是無情、因風而動、第二人難言、風幡但是無情、如何得動、第三人因緣和合故合動、第四人言幡不動、風自動耳、衆人論喧々不止、能大師高聲止諸人曰、幡無如餘種動所言動者人者心自動耳、宗印法師聞已……大歡喜歎曰何期南方有如是無上之法寶

六祖壇經の書志學的研究

興聖寺本

至高宗朝、到廣州法性寺、值印宗法師講涅槃經、時有風吹幡動、一僧云幡動、一僧云風動、惠能云、非幡動風動、人心自動、印宗聞之竦然。

明藏本

遂出至廣州法性寺、值印宗法師講涅槃經、時有風吹幡動、一僧曰風動、一僧曰幡動、議論不已、惠能進曰、不是風動、不是幡動、仁者心動、一衆駭然。中略

印宗聞說、歡喜合掌言、某甲講經猶如瓦礫、仁者論義猶如真金。

(三一)

此一段は別傳の文最も繁にして興聖寺本は最も簡であるが、恐らく後者は前者の餘りに繁に過ぐるを以て之を節略し補入したのであらう。而して明藏本は興聖寺本の餘りに簡に過ぐるを見て、又幾分之を修飾したものと思はれる。敦煌本が何故に此一段を略したか明らかならぬが、或は印宗によつて授戒せられたことを好ましく考へなかつたのかも知れぬ。しかし王維の六祖碑文にも、

南海有印宗法師、講涅槃經、禪師〔六祖〕聽於座下、因問大義、質以真乘、既不能酬、翻從請益、乃歎曰、化身菩薩在此色身、肉眼凡夫、願開慧眼、遂領其屬、盡詣禪居、奉爲桂衣、親自削髮、於是大興法雨、普灑客塵。

とあるから風幡の話の如きは、或は後人の作爲附會する所かも判らぬが、其南海に印宗法師なるものに會ひ、又之によつて出家具式を受けたことも事實であつたに相違ない。尙ほ別傳には此事を以て儀鳳元年となすに、興聖寺本は何故か漠然と高宗朝となしたが、六祖が五祖に至つたのも高宗時代のことであるから、此に高宗朝に至り廣州に往つたといふのは、甚だ其宜しきを得ない。或は儀鳳元年なる年代に多少の疑があつたので、斯く漠然と書改めたものではなからうか。制旨寺と法性寺とは或は同一寺院であつたかも知れぬ。